

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成26年5月4日現在

機関番号：34310
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：23720345
研究課題名（和文） 12～16世紀の南シナ・東南アジア海域におけるイスラーム系集団の移動と文化変容
研究課題名（英文） The Migration and Acculturation of Islamic People in South China Sea and Southeast Asian Archipelago between the 12th and 16th centuries
研究代表者
向 正樹 (MUKAI, Masaki)
同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授
研究者番号：10551939
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）3,300,000円、（間接経費）990,000円

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、中国沿海部と東南アジア島嶼部のイスラーム史蹟における現地調査を行い、そこに残されたイスラーム碑文（おもにアラビア語墓碑）の相互の比較研究を行い、それによって、歴史的に海上交易によって結びつけられた当該海域におけるアラブ・ペルシャ系移民の通婚と文化接触の結果形成されたイスラーム系集団間の連環を探るものであった。

当該地域出土のイスラーム石刻のテキストから得られる年代的・地理的情報の収集、および、関連する漢語・アラビア語・ペルシャ語文献資料の網羅的分析を行った結果、12～16世紀前後において、南シナ海域・東南アジア海域に広く分散するイスラーム系集団の運動性や関係性に迫ることができた。

研究成果の概要（英文）：

This research project undertook the field researches at Islamic sites in the coastal region of China and Southeast Asian Archipelago and comparative analysis on the Islamic inscriptions, mainly on the Arabic tombstones remained in these sites. This study explored interlink among Islamic communities having been emerged as a result of hybridization and cultural exchange between Arab-Persian immigrants and natives in various societies connected by the seaborne trade.

Through the researches on periodic and geographic data obtained from the texts of the Islamic inscriptions from the region, together with comprehensive research on relating Chinese documents and Arabic and Persian manuscripts, this study discovered the linkages and relations among the Islamic communities dispersed in wide areas covering South China Sea and Southeast Asian Archipelago around the 12th-16th centuries.

研究分野：東洋史

科研費の分科・細目：交流史

キーワード：ディアスポラ、イスラーム、移動、文化変容、海域史

1. 研究開始当初の背景

「ディアスポラ（離散・離散共同体）」論は、ユダヤ人研究のみならず、さまざまなトランスナショナルな集団へとその射程を広げてきた。近年、海域世界に拡散した歴史上のイスラーム系集団をも、「交易ディアスポラ」（各地に分散する交易居留地・交易共同体を網羅する、ゆるやかな一体性をもつ共同体）として捉える動きがある。

ところが、人類学的視点で展開されるディ

アスポラ論は、しばしば歴史学（特に前近代アジア史）の成果の参照が不十分であり、逆に歴史学は近年進展著しいディアスポラ論の議論をフォローしていない。

2. 研究の目的

上述のような近年のディアスポラ論との論点の共有を視野に入れつつ、本研究は碑銘学・文献史学を土台に、海域イスラーム系集団の広域にまたがる活動実態を実証的に提

示することを目的とした。また、この集団の当該海域内での動きを、碑文の情報と他のアラビア語・漢語文献の情報とを照合しつつ探り、各地の、とりわけ中国沿海部と東南アジアのイスラーム系コミュニティ間の歴史的連関性を探ることを目指した。

3. 研究の方法

研究の出発点において、12～16世紀の南シナ海域と東南アジア海域のイスラーム系集団の動向について、筆者は下記のような仮説を立てた。

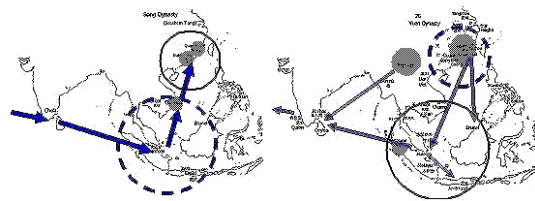
<作業仮説>

①7・8世紀より11・12世紀にかけて（宋代）、インド洋方面より南シナ海・東南アジア海域に進出したアラブ・ペルシャ系交易民が、中国東南沿海部にイスラーム系コミュニティを形成。

②13・14世紀のモンゴル帝国期に、ユーラシア規模で人の移動が活性化し、帝国の外部に開かれた辺縁にあたる雲南・福建において、漢人との通婚や文化接触を通じてハイブリッドなイスラーム系集団が形成され、南シナ・東南アジア海域に拡散。明の海禁政策に

概念図：アジア海域における国際交易の重心移動

①宋（東南アジアから中国沿海部へ） ②元末～明（中国から東南アジアへ）



より中国人が海外へ出なくなると、東南アジアに来ていたハイブリッドな人々が中国人でなくムスリムになる。

※イスラーム系集団の集中・拡散は、アジア海域の国際交易の重心移動（交易や交通の集中する地点の移動）と密接に関わる

従来の研究では、①の局面から②の局面への推移、それとかわる国際交易の重心移動を裏付けるデータが十分に提示されていなかった。そこで、関連する諸言語文献から、イスラーム系集団の動向に関わるデータを徹底的に再整理して、集団の具体像を探り、当該地域におけるイスラーム碑文の時期別出土件数や碑文相互の類似性を分析し、イスラーム系集団の集中・拡散に関するデータを得ようと考えた。

4. 研究成果

本研究課題の成果を、(1)内容面…史蹟調査およびイスラーム石刻の情報収集活動およびテキスト解読と整理、関連諸言語文献と合わせた総合的分析、(2)アウトプット…国際学会での報告、碑銘学の専門研究書、

一般概説書への成果の出版、の二側面から述べてみたい。

(1) 内容面

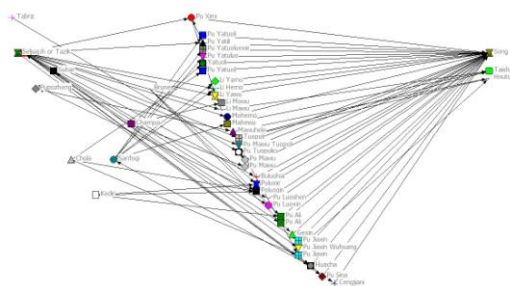
ここでは、上記<作業仮説>の枠組みに沿って、本研究課題の作業を経て達した結論を提示する。

①宋（東南アジアから中国沿海部へ）

北宋初の開宝年間（968-976）は、南インド・東南アジアの諸国からの朝貢が盛んにみられた時期である。じつはこの「朝貢ブーム」には、アラブ・ペルシャ系海上商人が密接にからんでいた。唐代あるいはそれ以前からすでに広州は中国の貿易ターミナルとなり、インド系、マレー系、アラブ・ペルシャ系等の海上商人が集まった。ところが、唐宋に反乱軍が広州を攻撃すると、外来商人は離散し、多くがクダ（マレー半島）に拠点を移した。そして、70年近くの分裂時代を経た、宋による再統合が海上商人を再び中国港市に招きよせることになる。その主要勢力はアラブ・ペルシャ系の海上商人であった。宋と海外諸国との関係のかなりな部分は、かれらの請負の上に成り立っていた。

そのことを確かめるため、『宋史』、『宋会要輯稿』等の朝貢記事に見える大食船主・大食蕃客つまりアラブ・ペルシャ系商人のデータを網羅的に整理し、図1を作成した。

図1 大食船主・蕃客を介した諸外国から宋



への朝貢

左側に位置するノード（結節点）は朝貢国（王）を、中央に三日月状に並ぶノードは大食船主・蕃客を、右側に位置するノードは宋皇帝（と使節の接触の場、開封・泰山・汾陰）を表し、ベクトル（矢印）とエッジ（線）で個別の朝貢活動における派遣主・被派遣者・受入者（宋皇帝）の繋がりを表す。各次の朝貢において、諸外国と宋との関係が大食船主・蕃客を媒介して繋がっている様子が見取れる。

また、本研究課題の一環で、2012年8月に泰山や汾陰など宋皇帝の儀礼の場を訪問し、関連資料の収集・分析を行った結果、上記の諸国や使となった人物の間関係性も明らかとなった。

勿巡国（現在のオマーン）の船主という蒲

加心は、7年前の1004年秋には大食蕃客として入貢していた（『宋史』大食伝）。大食国の使陀婆離は、11年前の1000年に「舶主」として来貢し、1008年には真宗が泰山で封禪の儀式を行ったときにも「舶主」として参列した。1019年に陀婆離が大食の使として来貢し、副使は蒲加心であった。

一連の朝貢は、ペルシャ湾やインド洋の諸港のアラブ系・ペルシャ系商人のうち、広州に居留する者達（蕃客）によるもので、大食国の正式使節というのは偽装であった。1011年の朝貢も、フィリピンのブトゥアンとみられる蒲端国を巻き込みつつ、実際は蒲加心・陀婆離ら「舶主」や「蕃客」により行われたものであった。1003年に再び蒲端国と大食がともに朝貢している事実は、両者（大食商人と蒲端国）の結びつきの持続を示す。

中国港市に居留する「蕃客」たちは、交易者や仲介者としての活動を通じて財力を蓄え、港市社会において大きな影響力を獲得していった。

②元～明（中国から東南アジアへ）

モンゴルの元が南中国を併合したのち、まず貿易関係を復興することから始めなくてはならなかった。元の皇帝クビライは、泉州・杭州ほかにはやく市舶司を置くと同時に、海外諸国に貿易商人を派遣した。元の貿易関係は、宋以来のアラブ・ペルシャ系商人の子孫である蒲寿庚の貿易網の上に立って形成された。

クビライ政権の遣使の目的は、北宋時代の大食舶主の朝貢活動と同様、マラッカ海峡に後退した海上貿易の拠点をも中国港市に呼び戻すことであった。アブー・ルゴドのいうように、マラッカ海峡は中国が後退したときにはその役割を増すが、中国が積極的に海上に出てくると重要性を失うという関係にあった。このようなシーソー的な発展関係は、幹線となる海上ルートと主要なターミナルが極めて限定されている状況下でみられやすいといえる。

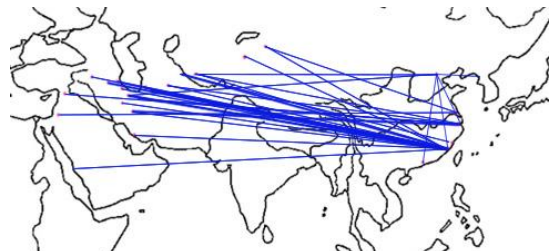
中国沿海部の北京・揚州・杭州・福州・泉州・広州で、元統治下のこれら諸港に來航し居留していたイスラーム教徒たちの墓石が多数発見されている。それらは墓主の出身地・没年を記す、ペルシャ語・トルコ語・漢語の要素を含んだアラビア語銘文をもつ。

本研究の中心課題であるこれらのテキスト分析の結果、次のことが判明した。

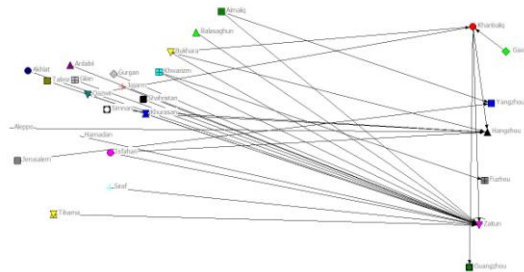
まずこれらの墓主の出身地は新疆、トランスオクシアナ、イラン、ホラーサン、ホラズム、アルメニア、シリア、アラビアに分布し、意外にもインドや東南アジアの出身を示すものは皆無であった（図11）。かれらの大部分は、イラン・トルキスタン地方の在地エリート層や富裕層であろう。代々官僚や大商人

を出す名門の一族の出であり、カラキタイやホラズム征服の際モンゴルに投降し、政権に取り込まれ、元の治下の中国でも、官僚や商人を輩出しつづけた。

図11 中国沿海部各都市出土イスラーム墓石の墓主の出身地



これらの墓碑に預言者ムハンマドの言葉



として「(A) 異邦で死すのは殉教である。」それが短縮された「(B) 異邦人の死は殉教である」といった銘文が繰り返し見られる。これらは、預言者の言葉であるとされるものの出典は明らかでなく、管見の限りでは中国東南沿海部それも揚州・杭州・福州・泉州・広州には見られない。タイプ(A)の銘文の初出は1290年の没年を刻む泉州出土の墓碑であり、タイプ(B)の初出は1302年の揚州出土の碑文である。ところが、明らかにこれらと類する「(P) 異邦人の殉教者」という銘文をもつ、他のいずれの銘文よりも古い1272年という没年を刻んだ墓碑が泉州に存在する。1272年といえば、泉州が元の支配下に入る4年前である。しかもこの墓の主は、驚くべきことに「ホラズムのシャー（国王）の子ムハンマド・シャー」であるという。この墓碑は元来、泉州東郊の靈山にあるムスリム聖人墓地にあったといい、特別な崇拝を受けていた可能性がある。元の時期の中国東南部のアラビア語墓碑をみると、旧ホラズム王国領のイラン・トランスオクシアナ出身者が非常に目立つ。かれらホラズムの遺民にとり、故郷の王の一族は特別な思いを抱かせる存在であり、生前はおそらく現地のムスリムのリーダー的存在であったろう。その死を偲んだ墓碑の銘文(P)から(A)や(B)のような「異郷の死ぬこと＝殉教」という言葉が生みだされたのだろう。

タイプ(A)のみをもつ墓碑は泉州に多く見

られ（10件）、没年が判明する者はほぼ1290年代、1300年代である。アルマリクとカズウィーン出身のハージー（メッカ巡礼の経験者）、スルタン・フサインの子カラター・タキーン（トルコ語「テギン」に当たる）、ブハラ出身で聖裔「サイイド・アジャッル」を名乗るトガン・シャー、ハンの称号を名乗る大都出身のシャイフ（ムスリムの長老）を含む。

大都の墓碑では(A)と(B)どちらの銘文も見られない。

揚州では合計四つの墓碑のうち、2件が(B)の銘文のみをもち、2件が(A)と(B)の銘文をともにもつ。前二者は、一人は1310年没のイェルサレム出身の人物で漢文銘によれば徽州路ダルガチの捏古伯という名の人物であり、もう一人は1324年没のアイシャ・ハトゥンという名の女性である。後二者は1302年没のアラー・ウッディーンと1324年没のアルマリク出身のシャムス・ウッディーンである。

杭州では19件のアラビア語墓碑のうちタイプ(A)の銘文のみの墓碑は1件あり、商人とみられるイスファハーン出身のフワージャ・シャムス・ウッディーン・ムハンマド（1317年没）のものである。(A)と(B)の銘文をともにもつものは2件で、1件は1307年没のフワージャ・フサーム・ウッディーンのものであり、もう1件は1318年没大都出身でアルスランの子マフムードのものである。前者の父ヤガン・トゥグリルという名やイエケ・ワリーという称号はトルコ語・モンゴル語の要素を感じさせる。

広州の陸川県ダルガチのラマダーンの碑文は(A)の銘文のみをもち。

表1 中国沿海部各都市出土イスラーム墓石の定型句(P)(A)(B)

	(P)	(A)	(B)	(A)&(B)
揚州			2(1310, 1324)	2(1302, 1324)
杭州		1(1317)		2(1307, 1318)
福州		1(1365)		
泉州	1(1272)	10(1290, 1299, 1302, 1303, 1304, 1325, ...)	1(1366)	
広州		1(1352)		

つまり、銘文(A)の使用は泉州で始まり、杭州で銘文(B)が銘文(A)から派生し、泉州に

伝わった。路や県のダルガチという官職を帯びる者、シャー、テギン、ハン、ハトゥンなどペルシャ語、トルコ語、モンゴル語で王族を彷彿とさせる称号、ハージー、シャイフ、フワージャなどいずれもムスリムの間で尊敬を受ける地位にある人物の称号をもつものばかりである。

これらの人物の故郷はヴァラエティーに富むが、おそらくモンゴルに仕えて支配階層に入り、中国各地の任地を転々とした異邦人地方官とその一族であろう。しかし、中国東南部沿海地方においては、貿易や輸送にかかわる官職に、外国人商人が任命されることもあった。福建沿海部におけるムスリム名をもつ官員の高率は際立っている。とくに貿易港を擁する泉州路や税関業務に関わる市舶司・転運司におけるムスリム名の官員の率は他の追従を許さない。

ムスリム名をもつ官員の多さは、具体的な政治動向との関連もおそらく皆無ではない。例えば泰定帝期前後の泉州市舶司のムスリム名の官員は、中央で権力を握ったダウラト・シャーの派閥に連なるものたちである可能性がある。一方でまた、福建のように帝国中心部からひどく離れた地は、官吏任用にも特別な規定が適用されており、現地に赴任した者が同じ地域の官職を歴任することや、世代を超えて同地域で引き続き任官することが可能であった。

福建は一般には赴任先として敬遠されたため、異邦出身の官員が世襲的な地方エリート層を形成していく傾向を助長した。結果、福建においてはムスリムが「色目人」と呼ばれた非漢人集団の代表格となる。「偽色目人」と呼ばれる、妻や母の影響でムスリムとなったものの存在は、ムスリム官人らが現地の漢人との接触などによってハイブリッドな集団を形成していたことを証明する。同時に、海外からのアラブ・ペルシャ系移民も沿海部の世襲エリート層を構成していたであろう。例えば、元初の蒲寿庚の任官の例のほか、泉州大商の馬合馬丹的はその船団ごと運糧万戸に任命された例がある。

モンゴル帝国の統治システムの中では、さまざまな種類のヨコのコネクションもまた、主要な貿易港を擁する帝国沿海部と、帝国の首都と最大の経済中心地である浙江地方とを結びつける紐帯として有効に機能していた。平成23・25年度のフランス国家図書館および大英図書館でのアラビア語・ペルシャ語写本調査は、そうした事実に関する史料を確認する目的で行った。

シハーブ・ウッディーン（沙不丁）というアフガニスタン北部のクンドゥーズ出身の財政官僚は、1284年に福建から浙江に移り、行省の長となっていたマングタイと結託し、海上貿易に関与した。マングタイが福建から浙

江に移ったあとも、兄のジャライルタイが転運使として送り込まれ、一族の福建への影響力は持続していた。ラシード・ウッディーン『集史』によると、泉州の港の長官は、クンドゥーズ出身のバハー・ウッディーンであった。かれは同郷のシハーブ・ウッディーンと関係があるかもしれない。

他の広域にまたがる一族のコネクションの例に、フハラ出身で預言者ムハンマドの聖裔というサイド・アジャッル・シャムス・ウッディーン一族である。かれの子ナスル・ウッディーンは父の雲南行省長官のポストを継承し、孫のバヤン（成宗テムル朝の宰相）はかつて泉州の長官であったという。そしてのちにバヤンの弟アミール・ウマルも福建で行省の長官となった。

『集史』によれば、アミール・ウマルの前に福建行省の長官であったのは、ダシュマンの兄弟であったという。ダシュマンはクビライのケシク長のひとりであり、モンゴルの皇族・王侯の委託を受けて交易に従事するオルトク商人や市舶司など海上貿易関係を統括する中央官衙のトップでもあった。

海域ネットワークの観点からみた場合、元と明の間の断絶は大きかった。明は、元とは正反対の政策をとり、海禁が施行され、それが倭寇の活動の爆発をもたらした。海外貿易への従事を禁じられた外来商人の子孫たちの一部は郊外または海外に離散し、地方のエリート層は科挙試験を目指すようになった。一方、反体制の傾向が強い漳州は、海賊ないし私貿易の拠点となっていった。

商業と宗教とが結びついた交易離散共同体（ディアスポラ）の動向に着目すると、変化の底にある一貫した流れを見出すことができる。

仏教・ヒンドゥー教にシヴァ教や土着の信仰が共存していたジャワにおけるイスラーム受容の歴史は、「九聖人」（ワリ・ソング）の伝承によって語られてきた。15世紀の始めから16世紀末にかけてジャワの各地でイスラームの伝道に功績のあった一群の人々である。こうした聖人のなかにはアラビア、ペルシャ、インド、中国の出身とされる者がいたという。ところが、かれらの伝道によって崩壊に導かれたとされる最後のヒンドゥー・仏教王国マジャパヒトの王都トロウランのイスラーム墓園マカム・トロロヨ（「死者の広い土地」の意）からは、プトリ・クンチャナ、デヴィ・アンジャスモロといったマジャパイト王族のものをはじめ14世紀後半の没年を刻んだジャワ人ムスリムの墓碑が多数発見されている。15世紀初頭の王の周囲のムスリム・コミュニティの存在や王宮周辺のムスリム居住地の存在を示す年代記の記述を裏付けるものとして興味深い。東南アジアにおけるイスラームの浸透は15～16世

紀に急激に始まったのではなく、漸新的に進んでいった可能性が強い。

ブルネイ博物館所蔵のスルタン・マハラジャなどの肩書きが記された無紀年のアラビア語墓碑と泉州で出土の1301年の紀年をもつアラビア語墓碑のデザインとテキストの特徴は完全に一致し、前者は14世紀初頭のムスリムのスルタンの墓石であると推定される。これは1368年に王国を樹立したとされるブルネイの初代スルタン・ムハンマド・シャーより半世紀も早い。マカム・トロロヨの墓碑群の紀年（没年）のタイム・スパンは、1368年から1611年に及ぶ。中国沿海部の泉州・揚州・杭州・広州にみられるアラビア語墓碑のタイム・スパンは1173年（1129年?）～1371年となっており、多くがモンゴル帝国支配後半期の1270年代～1360年代に集中している。両者が入れ換わるように増減したことは、ムスリム商人たちの来航と居留のセンターとしての地位の交替を示すか。最終年度に調査を行ったマジャパヒト朝の碑文については、まだ分析を必要とするので現段階ではこの点についての結論を出せない。

マクロな観点から見通しを述べると、元の支配期末期にあたる1360年代を超えると、中国沿海部におけるアラビア語墓碑数が激減するのは、とくにムスリム商人が多く来航し居住していた泉州で、ムスリム自衛軍団「亦思巴奚（イスパーハ?）」が町を占拠し、その平定後に数千人のムスリムが殺害され、あるものは周辺農村に逃れ、あるものは海外に逃れるなどしたためである。さらに、追い打ちをかけたのが、明の洪武帝による、泉州における蒲寿庚一族に対する貿易従事禁止令であったとされる。その結果、ムスリム商人たちの来航するセンターは東南アジアに移行せざるをえなかった。やがてマラッカ王国がイスラーム化すると、元の時代には南中国港市、北スマトラ、そしておそらくはブルネイなどに拠点をもっていたムスリム商人が、そこに多く集まるようになったであろう。

（2）研究成果のアウトプット

2012年3月にカナダ・トロントでのアジア学会（AAS）、4月に韓国ソウルでのアジア世界史学会（AAWH）、8月に中国天津での元史国際会議、12月にインド・コルカタでのアジア太平洋学会（IAAPS）と、本研究課題にとり重要な学会に参加し、ディアスポラ論や石刻研究をテーマに報告し、有意義な情報交換をするとともに、中国、韓国、インド、北米の関係分野の研究者に向け本研究の成果を発信することができた。こうした積極的な成果の発信が実を結ぶ形で、ディアスポラ論や社会ネットワークに関心をもつ国内外の研究者から反響があり、今後の連携（後述）に向けての足がかりが得られた。

また本研究課題に関連する成果として、論文3件を投稿し、図書4件に寄稿し、いずれも年度内に刊行された。うち、論文2件・図書1件は中国語、図書1件は韓国語で出版され、図書2件は、広く一般向けに書かれたものである。最新のディアスポラ論の観点を取り入れた研究成果を広く国内外や一般社会に発信するという本研究の目的を一定程度達成できた（さらに英語の中国イスラーム碑銘学についての論集や、日本語のグローバルヒストリーについての論集に寄稿し、現在、出版待ち）。

12～16世紀の南シナ海・東南アジア海域のイスラーム系集団のディアスポラ・ネットワークの例は、より大きな世界史の中に位置づけることが目下の目標である。具体的には、マニ教・ゾロアスター教・仏教・ヒンドゥー教・キリスト教など他の世界宗教についても、12～16世紀は、それぞれの宗教が内面的に自己を再形成し、さらなる展開を見た「移行期」にあたる。

本研究課題で取り上げた中国東南沿海部や東南アジア海域は、イスラームと中国、インド文化、在地文化が出会う異文化接触ゾーンであったが、そのような地域は、例えば、中国の西域への窓口にあたる甘肅・寧夏地区など他にもあり、本研究課題の成果をより大きな枠組みの中で位置付ける際の比較対象として挙げられる。

本研究課題で得られた知見と、研究者ネットワークを活かして、今後、同時代のユーラシア他地域の世界宗教と交易ディアスポラを共通テーマとする比較史研究を進めたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ①向正樹、「《楊庭璧平寇記》再考—忽必烈朝海上勢力の一個事例研究」『元史論叢』14、2014年、pp. 251-259
- ②向正樹、「モンゴル帝国の海上進出を読み直す」、『ふびと』64、2013年、pp. 21-44
- ③向正樹、「從福州到杭州—元代初期江南行省官員忙兀歹对南海貿易的影響（1274—1290）」、李治安・宋濤編、『馬可波羅遊歷過的城市 QUINSAY 元代杭州研究文集』2012年、pp. 156-173

〔学会発表〕（計4件）

- ①Mukai Masaki, Regenerating Trade Diaspora: Overseas Trade and Arab, Persian Communities at Chinese Port Cities during the 10th-13th Century, Indian Association for Asian & Pacific Studies (IAAPS), Sixth Biennial International Conference, December 17-19, 2012, Kolkata: University of

Calcutta

- ②向正樹、忽必烈朝期海上勢力の個別研究—“楊庭璧平寇記”和相關資料的分析、元代国家与社会國際學術研討会、2012年8月25-27日、天津・南開大学、張北県
- ③Mukai Masaki, Supra-regional Contacts and the Diaspora of Hybrid Muslims in the South China Sea during the 10th-15th Century, 2nd Congress of Asian Association of World Historians (AAWH), April 27-29, 2012, Seoul: Ehwa Women University
- ④Mukai Masaki, Trade Diaspora at the Periphery of Empire: Influx of Central Asian Muslims in Fujian Coastal Region During the Yuan Period, Annual Conference of the Association for Aian Studies (AAS), 15 March, 2012, Toronto: Sheraton Centre Hotel

〔図書〕（計4件）

- ①羽田正編、伊藤幸司、榎本渉、岡美穂子、岡元司、佐伯弘次、杉山清彦、中島楽章、橋本雄、羽田正、藤田明良、向正樹、森平雅彦、山内晋次、山崎岳、四日市康博、渡辺美季著『東アジア海域に漕ぎだす1海から見た歴史』東京大学出版会、2013年、304p
- ②모모키 시로（桃木至朗）編、桃木至朗、山内晋次、藤田加代子、蓮田隆志、佐藤貴保、向正樹（他30名）著、『해역아시아사 연구 입문（海域アジア史研究入門）』민속원（ミンソクウォン）、2012年、pp. 237-242
- ③秋田茂、桃木至朗編著、堤一昭、向正樹、中村武司、長縄宣博、後藤敦史、飯塚一幸、中嶋啓雄著『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会、2013年、pp. 71-107
- ④復旦大学文史研究院編、葛兆光、羽田正、岡元司、吉尾寛、向正樹、陳波、中島楽章、朱莉麗、藤田明良、張翔、王振忠、徐静波、杜春媚著『復旦文史專刊之四 世界史中的東亞海域』中華書局、2011年、pp. 53-58

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.coffeebreak-station.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

向正樹 (MUKAI, Masaki)

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号：10551939